

生命の価値について

— ドゥオーキンの創造的価値及びベネターの誕生害悪論を比較して —

高橋 檜之介（人間学コース）

（指導教員：堂園 俊彦）

キーワード：生命、価値、利害関心、創造、苦痛

序論

一般的に、人生の目的や意味について万人が納得できる解答は存在しない。しかしその一方で、国際的に基本的人権や人道が叫ばれるように、私たち個人や友人、恋人、家族あるいは同国民だけでなく、人類全体に対して何らかの配慮や尊重が為されるべきだという思考が私たちの間には確かに存在するように考えられる。しかし、近年人間のこれ以上の生殖と人口増加を憂慮する立場の人々によって、人生に積極的な価値を認めず、段階的な絶滅までを提唱する反出生主義の言説も提唱されている。こうした潮流の中で、私たちが私たち自身の生命、ひいてはその存在をどのように肯定できるのか、あるいはどのように否定するのかを探り、生命の価値の盤盤を明らかにすることは、人類の生き残りが問われる時代において重要な議論の基礎となるのではないだろうか。本論文では、ロナルド＝ドゥオーキン『ライフズ・ドミニオン』及びデイヴィッド＝ベネター『生まれてこない方が良かった—存在してしまう事の害悪』の二つの著書を取り上げ、この問題を考察する。

第一章 ドゥオーキンにおける生命の価値

第1節 本質的な価値

ドゥオーキンが定義する生命の本質的な価値 (intrinsic value) とは、人々がそれを楽しんだり、欲したり、必要としたり、当人にとってそれが良いものであるということからは独立した、神聖にして不可侵な価値である。つまりは生命とは主観によってではなく、客観的に普遍性のある価値を持つのである。彼によればこの価値は、私たちが普遍的に抱く創造性への畏敬の感情から生じる。私達は一般的に、人の手によって作り出された芸術や文化、また、自然によって作り出された風景や環境に感動し、それを保護しようという観念を抱く。これは彼曰く、私たちはそれらが創造された過程とそこでなされた創造的投資 (creative investment) に対して無意識かつ普遍的に尊敬の念を抱いているからである。ゆえに私たちは私たちの生命と人生に対してもそこに創造性を見出し、客観的に尊重しようとするのである。

第2節 二種類の利害関心、経験的あるいは批判的

ドゥオーキンによれば、創造的投資の結果生み出される価

値あるものの一つが人生である。人生の価値をドゥオーキンは、「経験的利害関心 (experiential interests)」と「批判的利害関心 (critical interests)」の二つの概念を用いて説明する。

「経験的利害関心」とは、娯楽等に代表される様々な経験に伴う所謂快楽と苦痛であり、一般的にも人生の価値の指標とされることが多い。他方、「批判的利害関心」は、仕事や勉強など、一般的に努力や忍耐を要求される事であり、経験的には苦痛であることが多い。しかしながら、人はそうした経験を選択し、それが自らの人生において必要な物であると考え。なぜならば、個人は自らの人生をよりよくしたいという抽象的な野心を抱き、それを満足させるために自らの人生にアイデンティティを形作る一貫した構造を要求するからである。つまり人は自分らしい人生を創造し、投資する主体であろうとする。そしてこのようにして人生は本質的な価値を持つようになるとドゥオーキンは説明する。

第二章 ベネターにおける生命の価値

第1節 ベネターの誕生害悪論

ベネターは、人が生まれてくることは常に当人にとって悪であり、よって人は生まれてくるべきではないという誕生害悪論を提唱する。その根拠は以下の通りである。ある人が生まれた場合、その人が人生を苦痛と感じている場合と、人生を快楽だと感じている場合が考えられる。この場合、前者は単純に悪であり後者は善である。他方、ある人が生まれなかった場合、そこに苦痛も快楽もない。この場合、苦痛が存在しない事は善であるが、快楽が存在しない事は悪ではなく、良くも悪くもないと考えられる。ゆえに生まれた場合と生まれなかった場合を比較すると、生まれてこない方が良いという結論が常に成り立つと言うのである。この単純な比較によって、彼は人生が常に生きるに値しないと主張する。彼にとって生命とは一般的に負の価値を有しているのだと言い換えることが出来るだろう。

第2節 なぜ人は人生を肯定してしまうのか

ベネターはどうして多くの人が誕生害悪論を真剣に受け取らず、楽観主義的な態度を取ることが出来るのかを説明する。彼によれば、私たちは、過去について悪い事より良い事を思い出し、未来に対して楽観的な予測をしがちである（こ

うした楽観主義的なバイアスは心理学的にポリアンナ効果と呼ばれる)。加えて人間は、現在の苦痛に慣れてしまう、よって人々の幸不幸の自己判断は認知的に歪みがあり、信用ならないと彼は言う。そしてまた、ベネターは人生の無意味性についても言及する。人々は人生を人間的な観点からしか眺められないために意味があると思いついでいるが、仮に俯瞰的な宇宙的視点ともいえる立場から見れば個々の人生の差にどれほどの意味も見いだせないのである。このようにベネターは、私たちの生命及び人生とは私たちが思っている以上に苦痛に満ちたものであり、また無意味でもあると断言した上で、人類が命の連続性を保ち続けることは膨大な苦痛の無意味な量産であり、そうしない方がいいのは明らかであると結論する。

第三章 比較考察

第1節 両者の相違

ここまでの一見正反対とも思える両者の論を比較するにあたり、まずは二者の視点の相違に着目した。ドゥオーキンの定義する生命の本質的な価値は、今現実存在している私達の生命を対象にしたものである。その一方で、ベネターが否定するのは、まだ生まれていない、これから生まれてくる人々の生命である。つまりベネターは、今現在存在している私たちの生命を否定しているわけではないのである。実際ベネターは、今生きている人々の生命について、一定の道徳的考慮を要する利害関心があることを認めている。だがその一方で、この利害関心は、これから人々が生まれてくることを肯定するほどの価値を含んではいないと言う。つまりベネターは、人生に含まれるポジティブな価値の一切を基本的に排除した上で、人生を苦痛というネガティブな要素に満ちたものだとする結論を導いているのである。

第2節 懐疑論について

ドゥオーキンによれば、懐疑論とは人生の本質的価値、ひいては人の生きる意味全般についての懐疑的見解であり、二つのタイプに分けられる。一つは外在的懐疑論であり、これは形而上学的な真理性や根本的性質に基づいた、人々の人生の思考への批判である。つまりは、宇宙的で超越的な視点から見れば、私達の社会や歴史的枠組みの価値づけなどは何の意味もなくなってしまうという批判的思考である。ベネターの誕生害悪論は、外在的懐疑論に区分される。そしてもう一つのタイプの懐疑論は、内在的懐疑論と称されるものである。ドゥオーキンによれば、これは一種の無気力、投げやり、厭世を伴いながらある個人の内面でその人の人生を無価値にしてしまう確信である。

ドゥオーキンはこれら二つの懐疑論のうち、前者の外在的懐疑論を問題視はしない。何故なら、超越的な視点で人々の生命に何の客観的意味がなかったとしても、現実の人間社会では、宇宙的な視点からの意味もまた同様に無意味だからである。これに対して、内在的懐疑論は、その懐疑が向かう対

象、即ち自らの人生を全体的によりよく創造しようとするモチベーションである批判的利害関心を無力化してしまう。究極的に、批判的利害関心という個々人の人生への動機づけは、社会の承認と当人の自己満足以外に絶対的な根拠を示すことはできない。そのため人々は人生に価値がないと言う懐疑を内的に認めてしまえば、あとはそうした懐疑が一般的ではないと言う相対的な事実によってしかそれに反論することが出来ない。そしてまさにベネターはこうした内在的懐疑的手法により人生の価値を一般的に無意味化しようとする。それは前述したポリアンナ効果のような心理学的認知バイアス等であり、私たち自身が私たちの人生をマイナスであるという結論を導くための論理展開である。

しかし、こうしたベネターの主張する人生の無意味性の一般化が上手くいくとは言い難い。というのも、ベネター自身が指摘するように、私達は楽観的な認知バイアスをもっているからであり、さらには、ドゥオーキンが批判的利害関心に関して述べたように、私達は苦痛に対して単に経験的な嫌悪だけでなく、それを超えて自らの人生にとっての有意性を見出すことが出来るからである。ここまでの比較において、ドゥオーキンとベネターの主張はどちらかが明らかに間違っているのではなく、結局は自己の人生の創造を積極的に肯定するか、それとも懐疑によってそれを放棄するかは、個々人の選択に委ねられざるを得ないのだと思われる。その一方で、真に客観的な視点から生命に価値を見出すことはできないという点においては、両者の見解は一致する。だからこそ、人生や生命の価値とはそれが宗教的なものや自然的なもの、あるいは別の見解であれ、究極的にはどのような説明を人々が受け入れるかどうかなのだと考えられる。

結論

本論文では、人の生命の価値について真逆の見解を示した二者の思想の展開と相違を考察してきた。その上でどちらも、生に対する真摯な態度という方向性は一致しているように思われる。人間の視点、相対的な世界を超えた絶対的な価値は説明できない以上、人生の価値は常に個人の中に内在する懐疑論に脅かされ得る。それに対してどういった結論を導くかは個々人に委ねられざるを得ない以上、生に対して真摯に向き合い考え続ける態度こそが、その結論がプラスであれマイナスであれ、生命に価値をもたらす唯一の方法ではないかと考えられる。

主な参考文献

- ・ ロナルド・ドゥオーキン (水谷英夫・小島妙子訳) 『ライフ・ドミニオン—中絶と尊厳死そして個人の自由』(信山社、1998)
- ・ デイヴィッド・ベネター (小島和男・田村宜義訳) 『生まれてこない方が良かった—存在してしまうことの害悪』(すずさわ書店、2017)

本要旨は、『2021年度 静岡大学人文社会科学部社会学部 卒業論文要旨集』第18号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。